

中世の 隠者文学

出席者

伊藤博之 (司会)

大曾根章介

大隅和雄

三木紀人

木藤才蔵

世にしたがへば、

心、外の塵に奪はれて惑ひやすく、

人に交れば、

言葉よその聞きに随ひて、

さながら心にあらず。

人に戯れ、物に争ひ、

一度は恨み、一度は喜ぶ。

その事定まれる事なし。

分別みだりに起りて、得失止む時なし。

惑ひの上に酔へり。

酔の中に夢をなす。——『徒然草』第七五段より



『シンポジウム』日本文学

6

出席者略歴

いとう・ひろゆき 一九二六年生。東京大学文学部卒業。現在成城大学教授。主要著書は『隠遁の文学』（笠間書院）など。

おおそね・しょうすけ 一九二九年生。東京大学文学部卒業。現在中央大学文学部教授。主要著書は『往生伝・法華験記』（共著・日本思想大系）岩波書店 など。

みき・のりと 一九三五年生。東京大学文学部卒業。現在お茶の水女子大学助教授。主要著書・論文は『雑談集』（三弥井書店）『威月と兼好』（『中世文学の研究』東大出版会所収）など。

おおすみ・かずお 一九三三年生。東京大学大学院修了。現在北海道大学文学部助教授。主要論文は『通世について』（北海道大学文学部紀要「一二」）『聖の宗教活動』（『日本宗教史研究』I所収「古代末期における価値観の変動」（北海道大学文学部紀要「一六」）など。

きどう・さいどう 一九一五年生。東京大学文学部卒業。現在日本女子大学文学部教授。主要著書は『連歌史論考』上・下、明治書院『校注さきまじし・研究と解説』（三書院）『連歌論集』（『日本古典文学大系』岩波書店）『増鏡』（『日本古典文学大系』岩波書店）など。

司会者の諒解により検印を省略します 516

シンポジウム日本文学 6

中世の隠者文学

昭和51年 6月20日 初刷印刷
昭和51年 6月25日 初刷発行

司会者 伊 藤 博 之
発行者 鶴 岡 隆 巳

発行所 株式 学 生 社
会 社

東京都千代田区麹町局区内九段南 2-2-4
電話03(263)2611(代) 振替・東京1-18870番
編集担当 堀健二郎

落丁・乱丁本はおとりかえします
Printed in Japan

中世の 隠者文学

出典者

伊藤博之

大曾根章介

大岡和雄

三木紀人

木藤才蔵



シンボム 日本文学

6

出席者

伊藤博之（司会）

大曾根章介

大隅和雄

三木紀人

木藤才蔵

姜慎

杉浦康平＋鈴木一誌

『シンポジウム』日本文学——中世の隠者文学・目次

第一章 隱者

《報告》 伊藤 博之

隠者文学の系譜	三
隠者は何のために書くのか	二五
隠者の概念	二七
中国の隠者と日本の隠者	二〇
隠者と文筆活動	二三
隠遁精神の源流	二三
隠遁の批評精神	二五
遍照と榮平	二〇
色好み	二四
精神の方法としての隠	二五
隠遁者の虚像	二七
都と地方(郵)	二〇
数奇と道念	二四

第二章 保胤

《報告》 大曾 根章介

『池亭記』にみる隠遁	二七
白楽天『池上篇』と日本人の隠遁	二九

第三章 西 行

《報告》 大 隅 和 雄

自立的生活の不徹底？	三
自己と世俗の境界	五
西の京	五
東の京	五
隠遁と官僚貴族の意識	七
説話と保胤	九
信仰・野心・出家	六
自分だけの世界としての住居	三

遁世について	六
身と心	七
西行の孤独感	七
西行の先人	七
西行の出家	七
死への意識	六
仏者か詩人か	六
西行歌のわかりにくさ	六
心の意味するもの	六
西行の歌と隠の精神	六

想像力としての生命	10
心の友	104

第四章 長 明

《報告》 三 木 紀 人

長明論のための前提	109
好奇心——事の便りありて	113
長明をとりまく環境——長明の人間関係	116
大原山	119
日野山	123
構想について	124
記の文学	129
「略本」と「広本」	131
保胤と蓮胤	135
『方丈記』の読者	137
『方丈記』の読まれ方	141
“隠”の精神	144
方丈とは何か	148
求道か趣味か	152

第五章 兼 好

△報告△ 三 木 紀 人

『枕草子』と兼好	一六
伝統に対する新しい試み	一七
反隠者の文学	一八
距離をおいて見る目	一九
表現世界の含み	二〇
伝記研究と作品の読み方との関係	二一
『新古今』的な言語表現	二二
無用の用をねらった名文	二三
“隠”の精神	二四
兼好と『増鏡』	二五
『徒然草』のわかりにくさ	二六
書かずに我慢した側面	二七
隠者と友人	二八
隠者の変貌	二九
『徒然草』の美意識	三〇
遁世の意味	三一
無常観の問題	三二

第六章 心 敬

《報告》 木 藤 才 蔵

隠者文学としての連歌	三三
遙けさへの関心	三五
連歌と仏道	三六
心敬の文学	三九
宗祇の場合	三三
表現できないものの表現	三三
連歌の新しさ	三四
『新古今』の伝統と連歌	三六
連歌の享受の仕方	三六
風のイメージ	三四
隠者文学と現代	三四
隠者文学の読み方	三四
浄土思想と遁世	三六
あとがき	三六
参考文献	三六
事項索引	三六

中世の隠者文学

第一章 隱 者

《報告》 伊 藤 博 之

一 日本における通世の理念

「隱」という理念が問題視されるのは、世に顯れることをもって第一義とする社会においてであった。古代の官僚機構が整い、支配階級の人々が、一定の身分秩序による序列によって差別され、人々が他者との比較意識によって自己認識をもつようになったとき、人は比較を絶した自己価値の意識を喪い、直接的で素朴な生の喜びを見失うに至った。隱遁が切実に要求されるのは、そうした序列社会の競争からのがれるためではなく、他者との比較による秩序が整備された官僚社会において、對他意識に毒された心の歪みから、己れを取り戻し生の直接性に回歸するためだったのである。日本の隱遁の内実が数奇と道心と閑居の三つに要約できる

のは、立身出世のための手段と化した学芸に對し、「ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから情をやしなふばかり」(『方丈記』)の数奇心による学芸に、世界と自己との最も直接的で自然なかかわり方を

見出したからなのである。隱遁の理念がそうした学芸のあり方の自覚とかかわったことは、何も日本だけの問題ではなかったが、学芸における精進努力が、貴族官僚としての出世と結びつかなくなっていた一〇世紀以降の官人意識に切実な問題を投げかけるに至った。つまり「身は朝にありとも、志は隱にあり」(『池亭記』)という身と心(志)の乖離を見つめざるを得ないような情況が知識人貴族の間に広く見られるに至ったのである。

平安時代の文人貴族の間に『白氏文集』が愛読され、『千載佳句』や『和漢朗詠集』等の選集が親しまれるなかで、閑適と隱逸の詩情が受容されたことは、言葉の世界にのみ感得できる精神秩序としての隱遁を日本人に教えたと考えられる。貴族階級が第一に学んだ隱遁は、白楽天や陶淵明の詩文に見られる觀念世界のあり方の問題であった。そこでは、「職は柱下に在りと雖も、心は山中に住むが如し」(『池亭記』)といったように、生活者としての現実意識を仮りのものとし、文人としての精神生活を眞実なものと

みなすことによって、官人と隱遁の両面を生きる「中隱」の生き方が理想とされたのである。しかし、中世的な遁世思想はこうした文人的隱遁理念の延長に成立したものでなかったのである。

中世的な遁世思想が成立する前提には、第一に末法思想に触発された濁惡末世の時代認識と「予が如き頑魯の者」(『往生要集』)といった人間認識が知識人貴族の間に広まったことがあげられる。

第二には、仏教本来の出家思想が心ある宗教者によって実践的に受容されるようになったとき、道心のうながしによって真の出家をとげる二重出家の僧が多く現われるようになったこと、第三には、文化的優越性を根拠にして支配階級の地位を保ってきた貴族が、財力や武力の前にその根拠を押しゆがめられていくのを体験したとき、自己の存在根拠を再確認せざるを得ないような状況が深まったこと等があげられる。このようにして王法と仏法を車の両輪にたとえて、古代秩序の根幹としてきた理念が、王法においては儒教的な合理主義の行きつまりにより、仏法においては寺院社会の世俗化によって空洞化したとき、王法仏法の虚構の社会を離脱して、個人の内面的真実に根ざす生き方が求められるに至った。中世的な遁世思想は、そうした道心の自覚の上に成り立ったものであった。そして、その思想的根拠は、生の根拠を無相清淨の寂光淨土に見出した淨土教的世界観であった。

二 隠者文学の範圍

漢詩集においては、閑居・閑適・閑遊といった主題が重視され、閑適や隱逸の語は、詩集編集に際し、部立名として広く用いられる程であった。また中国では隠者の生きざまに寄せる関心が高く、『後漢書』以下の正史の列伝部には隱士の伝記が集められ、仕官をことわって高潔の志を貫いた高士伝や逸民伝が単独に編まれることも多かった。そのように詩・琴・酒を三友として老荘的な無為自然の幽趣を生きる隱遁や「天下に道あれば則ちあらはれ、道なければ則ち隱る」(『論語』)といった賢者の隱遁が詩文のテーマとされることの多かった中国の文化伝統に対し、わが国では「世俗には本より隱遁の室無く」と憶良が嘆き、隱士伝を持たない日本精神風土を「唐土の人は、これをいみじと思へばこそ、記しとめて世にも伝へけめ、これらの人は、語りも伝ふべからず」(『徒然草』)と兼好が批判したように、隱遁そのものを公的理念世界に位置づけることはなかったのである。しかし、文化活動の實質的な担い手が、官人社会外の専門的な知識人もしくは芸能者にとつてかわられた中世に入ると、文化荷担者の大部分が生活形態の上での遁世者に占められるようになり、見方によっては、中世文学の大部分をすべて隠者文学とみなすことも出来るような情況が現出したのである。

わが国の隠者文学の範囲は、すでに石田吉貞氏も論ぜられたように「『隠者の文学』——苦悶する美——」、「『隠者といわれるものの手になった文学』」を隠者文学とみる立場と、「『隠の生命』」を表現した作品のみを隠者文学とみる広狭二つの立場によって、その範囲のとり方は大きく違ってくる。折口信夫の隠者文学観はどちらかと言えば前者に属し、専門の文筆者の手になる物語・日記・紀行・随筆・説話・連歌のすべてを隠者文学としており（『日本文学発想の一面』折口信夫全集第7巻）こうした立場をさらに論理化し、中世文学の全体を「隠者独自の発想形式」の位相においてとらえたのが桜井好朗氏であった（『隠者の発想』、『中世日本人の思惟と表現』所収）。氏は純粹型隠者・内省型隠者・諷刺型隠者・歴史型隠者・外形型隠者と中世の文化荷担者を分類し、中世文学の主要ジャンルにおける作者主体の特質を隠者的な思惟に求めたのである。氏のように、もし外形型隠者までも隠者とするなら、武家と貴族を除く文化人や芸能者は、中世社会においては社会外の存在者と見なされていたので、そのすべてを隠者と呼び得ることになり、問題が余りに拡散してしまうので、ここではそうした立場から隠者

文学をとらえるのではなく、精神の方法としての隠遁を直接的に主題とした文学作品に限って問題を論じることにした。

隠遁をもし精神の方法とするなら、作者の生活形態や取りあげられた内容を離れて、世界把握の方法としての隠遁性が追求される必要がある、そのときは無常観と隠遁の関係とか自然観もしくは美意識の構造が論点に取りあげられるであろうが、そうした枠組によって問題にアプローチする用意を持たないので、文学史の通念に従って、保胤・西行・長明・兼好・心敬といった代表的な文学者を取り上げ、それらの作品が隠者文学と呼ばれる所以を再検討することにした。そして、「世を遁れて、山林にまじはる」生活（『方丈記』）や「人と生れたらんしるしには、いかにもして世を通れんことこそあらまほしけれ」（『徒然草』）といった考え方を書き記しているから隠者文学であるというのではなく、超越的な視座によって、迷心惑乱の人生の相を照らし出し、現世的な価値観を相対化してみせた文学的達成において隠者文学の本質をとらえてみたいと思っている。

隠者文学の系譜

伊藤 これから隠者文学の問題をめぐるシンポジウムに入るわけですが、じつは隠者ということばは、中世において

一般化していることはではなかったので、「遁世者」とよんでおく方が適當かとも思うんですが……。隠者という概念が明確になつてくるのは、西鶴の「艶隠者」などという言葉が受け入れられる近世に入ってからで、中世までは遁世者文学というべきなんだろうと思います。

それにしましてもこれまでの研究、または出された本の大部分に隠者文学というタイトルがつけられていますし、一般的にも隠者文学とよぶ常識ができあがっておりますので、時代的な用語としては問題はありませんが、いちおう隠者文学という押え方をするわけです。しかしこの遁世と隠者ということばが、そのように分けられていたということは、やはり日本の隠者文学の一つの特質を表わしているのではないかと思われまします。

というのは、「老荘思想の伝統を持つ中国では、隠者の存在が自然な形で受け入れられる基盤があったと思うのですけれども、日本の場合には、仏教の出家思想を抛り所にした「道心」の追求が、僧をして、さらに「寺」から出家させるといった事態を生み出した再出家の問題が、核になると考えます。もっと具体的にいうなら、「聖」「沙弥」の信仰が、遁世の思想を成熟させ、そうした遁世の思想が、思想行為としての遁世を一般化したと言えると思うんです。^{*}こうした遁世者の表現行為が日本の隠者文学を生み出したのであって、系譜論としてはだいたい常識が成り立っているわけです。

^{*} 大隅和雄「遁世について」(北海道大学文学部紀要) 13—2 昭和40・3 氏は上記の論文で、「二重出家の僧をいわゆる遁世者の先駆と見ることができる。二重出家は僧侶の房名とか号と呼ばれるものに端的にあらわれている。出家受戒して僧となったものは僧名を称するが、さらに遁世を重ねた場合には房名・遁世名を名乗る」と指摘している。

といいますのは、西行、長明、兼好、心敬、宗祇、芭蕉、こういう人たちをつなぐ系譜として隠者文学の問題を考える、この最も早い原型は、芭蕉自身が選びとった伝統の系譜にあるわけですが、明治に入って「文学界」の文学運動が、西行、長明、兼好、芭蕉の文学の再認識を主張して以来、そうした系譜論が広く行なわれるようになり、隠者文学の問題というのは、こういう土俵で設定されているのが一般的だと思ふのです。

しかし、また違う観点もあるのでして、文学の内容よりも作者の社会的立場を重視し、遁世的な知識人が筆をとった

作品をすべて隠者文学とする考えも存在します。平安時代は同じ知識人でも官人としての側面が重視されたのですけれども、中世になりますと、知識人の地位は相対的に低下し、公的な世界とかかわらない私的な文筆活動を自由に展開するようになったものですから、文筆を専門としている者はすべて、世俗の実用や生産活動と直接関係がないということとで遁世者、隠者と見なすことができます。それですから、もし書き手の問題として中世文学をとらえるとなると、中世文学のすべての領域、たとえば『平家物語』・『太平記』といった戦記文学までも隠者文学とよばねばならなくなります。もちろん説話文学は当然なのですけれども、こうなりますと隠者文学の範囲というのは無制限に拡がりまして、中世文学全部が隠者文学ということになってしまいます。

こういう考え方をした最初の学者は、折口さんですけれども、折口さんは隠者に芸能者まで含めて考えているようですから、そういう考え方が隠者についての一番広い考え方なんだろうと思うのです*。

* 「日本文学発想の一面」(折口信夫全集第7巻) おほまかに分けると、隠者には三種類ある。——相当な身分の人であって、隠居生活する者、たゞの僧侶、非常に低い階級の隠者、——ざっと以上の如くである。この低い階級の隠者と言ふべき者はかなり古くから存在してゐて、(中略)最初に文壇に現れて来るのは遊行女婦であつた。

私たちはそういう考え方はここではとらないわけでして、常識となっている西行から始まる系譜を中心にしなから、それをただで上がっている常識だからというのではなしに、日本の隠者の文学というのは、そういう範囲内で押えたほうが明確な問題が見出せるという見通しと、また、そういう問題の立て方で考えてみたいと思います。

隠者は何のために書くのか

伊藤 それでは、いったい隠者文学とは、どういうものかという問題なんですけれども、そもそも遁世者がほんとうに遁世に徹底するならば、他人とかかわりを持つためにものを書くということはあり得ないはずなのです。そうしますと、